

# ひと

## 聴覚障害のドキュメンタリー映画監督

いまむら あやこ  
今村 彩子 さん(31)



右手にはビデオカメラ、時に左手で手話をして、出演者と話をつなぐ。交通事故で手話が不自由になった聴覚障害の主婦や、健常者と一緒に働く銀行員たちを主人公に、10年前から監督としてドキュメンタリー映画を撮り続ける。

撮影中の次回作「珈琲とエンピツ」は初の長編。静岡県内のサーフショップを舞台に、聴覚障害の男性店長と健常者の客との日常を描く。そこでは、身ぶりや笑顔、ハグで思いを伝えあう。「鉛筆での筆談は時間がかかるけど、きずなが生まれることもある。大切なのは、伝える方法ではなく、伝えたいという気持ちです」

文・写真 志村英司

れた。小学3年の時に家でビデオで見た洋画「E・T・」。字幕のおかげで、耳の聞こえるほかの家族と初めて一緒に笑えた。同じ気持ちになれたのが、うれしかった。

聴覚障害者は全国に約35万人。会話を交わさなければ相手は障害に気付かない。障害者は居心地の悪さを感じ、健常者は接し方に戸惑う。

愛知教育大学を1年間休学し、ドキュメンタリー映画を学ぶため米国へ。講義には無料の手話通訳者がついた。驚いていると、同じ障害の米国人学生に言われた。「健常者の学生と同じ受講料を払うんだから、同じ内容を理解するための支援は当たり前」。目が覚めた。それ以来、支援を遠慮しない代わりに、障害を言い訳にするのをやめた。

「筆談は時間がかかるけど、きずなが生まれることもある。大切なのは、伝えたいという気持ちです」(聴覚障害者と健常者のコミュニケーションについて、映画監督今村彩子さん) 2

### ことは

